

六花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada
cover designed by masami

11月号



貫

山田六甲

菊日和しきりに鼻を舐める犬
秋水に鯉もみ合へる波紋かな
鴛鴦の各々羽を繕へる
木の陰を流れてゆける秋の水
秋晴や大の字に亀浮きゐたる
鴛鴦の頸をすくめて相寄れる
手摺から乗り出しぬ鴨触らむと
柵の影ゆがめて鴨に鴨寄れる
水に糞放ちて鴨の身震ひす

鴨を見る欄干らんかんの手にさす秋日
尻振つて鴨追ふ鴨の声高し
鴨の目に日のはね返る朝あしたかな
水滴を嘴はしに光らせ鴨啼なけり
水にゐて水を拒こぼめる鴨の胸
木の枝に残る蜘蛛くもの囿い小鳥来る
対岸の南なん京きん櫨はげは紅葉せり
水門を開く時刻や水の秋
浮寝鳥背羽せばね根せせりてまた眠る
苔剥はぎし石の湿りや白露はくろなる
餌えを鯉の口に譲りぬ池の鴨

こんもりと菊の咲きたる日なりけり
伸べる手の先は母の手薄紅葉
餌をくはへ群より離れゆける鴨
栗持つ子鳩に囲まれ泣きゐたる
秋天の光となりて鳩の群
鴨の餌に水の穴めく鯉の口
鴨の間あいすりぬけゆける真鯉かな
秋水に流されてゆく光かな
蔭に入る鴨の嘴青かりき



蜘蛛の糸硝子ガラスの城の如くあり
鴨のみお需形なりの崩れず消えゆけり
木屋を仰がば蜘蛛の囿に骸
音の立つ位置を選びて落葉踏む
まろき音立てて木の実の落ちにけり
餌に群るる鴨の間あいより赤き鯉
音重く進むボートや水の秋
己が影追ひ行く鳩や秋の昼
秋の日を浴びたる舟の湿りかな

片隅に走り書きあり捨扇

木内美保子

送り火や心の隅をいぶらせて
うらなりの西瓜ころがる九月畑
かなかなや雑木林の今日暮るる
あるなしの風が揺さぶる稲の花

捨扇らしさを生かした句。
急にメモしておかなければいけないことが起き、身近に紙や手帳がないから手持ちの扇に取りあえず書き付けた。そのことを忘れていたが秋になってほとんど使わなくなった扇を開いたら走り書きがしてあった。おそらく書き込んだのは夏の盛りであり、ポケットのない薄着をしていて手帳やメモ用紙を持っていなかったことなどがこの句から想像される。

洗い髪

貝森 光洋

両足を投げ出している洗い髪
拍動のまだ遺りたる蝉の殻から
何時見ても後姿の源五郎
金魚玉軒に目玉のある如し
釣つり忍しのぶ手枕のまま暮れてゆく

キャンプ

梶浦玲良子

真つ赤なバイク土用三郎到着す
病葉おや友禅ながす水の
上残ざん鶯おうに海峡か呵か々と横たはる
縄文の煙ばかりのキャンプかな
はんざきの大きさ棒切れ使ひけり

捨扇

木内美保子

送り火や心の隅をいぶらせて
 うらなりの西瓜ころがる九月畑
 片隅に走り書きあり捨扇すておうま
 かなかなや雑木林の今日暮るる
 あるなしの風が揺さぶる稲の花

風の色

笹村政子

朝顔の萎しぼめる数の勝りけり
 手に絡めかすらへくそ葛を引き抜きし
 風吹かば風の色なす秋野かな
 湯上りの耳に新たな虫の声
 波音のするまで歩く虫の夜

水涸^かるる

水谷ひさ江

団栗や山の匂ひを掌に
 美濃和紙の反^ほ古^こを広げて秋灯下
 仏壇に肥りてゐたる菊の虫
 図書館の音読する子青蜜^{みかん}柑
 水涸れや西行^{さいぎ}井戸^{いど}のふさがるる

紅葉供養

小田 元

腫^はれし足さすり紅葉の話しせず
 高々と天ひらひらと紅葉^{もみじ}黄葉^{もみじ}
 泣くまじと銀杏^{いちょう}黄葉^{もみじ}を睨^{にら}みけり
 ことり

雪 樹 集

六甲選

熱帯夜

三井 孝子

新盆の隣は垣根を低く刈る
半日を薔薇散る庭に過ぎしけり
寝てをらず覚めてもをらず熱帯夜
夏野へとボール抱へて走り込む
カラカラと落葉転がる野分^{のわき}あと



六花集

六甲選

久永 つう

病める子をあやしつつ聴く祭笛

夕焼に染め分けらるる遠嶺とおねかな

嬰兒みどりこの深く眠れる残暑かな

先に出いづや聞こゆる遠花火

担ぐ肩右に左に金魚売

金月 洋子

ほうたるを包むてのひら覗きけり

吾子の手へ移さば光る蛍かな

庭中に咲かせおきたる姫女苑ひめじよおん

両手もて大あぢさみを計りけり

大蓮の雨滴を溜ためて咲きにけり